

# 放射線被ばくとその影響について



## あなたが受ける 検査の被ばく線量

被ばく：放射線を浴びること  
線量：放射線の量  
単位：mSv(ミリシーベルト)

### CT 検査

2～30mSv

頭部：2.5mSv  
胸部：6.8mSv  
腹部：3.8mSv  
全身：13mSv

### 血管造影検査

9～11mSv

### 透視検査

4.2～32mSv

### 核医学検査

0.5～15mSv

### マンモグラフィ検査

2mSv 程度

### 胸部 X 線検査

0.06mSv

### 歯科撮影検査

0.002～0.01mSv

【急性障害】  
脱毛・不妊等

↑  
1000mSv

【発がん】  
リスク上昇

↑  
100mSv

10mSv

CT 検査  
2-30mSv

1mSv

0.1mSv

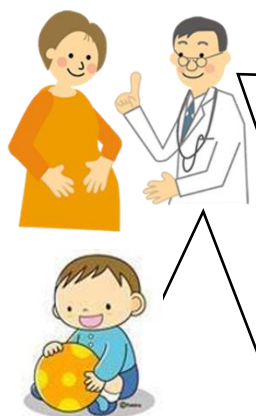
0.01mSv

**安心してください！**

通常の放射線検査の被ばくで  
**急性障害は発生しません**

**100mSv 未満 (※) で発がんリスクの上昇は認められません**

発がんを心配して検査を受けない事で  
病気の発見が遅れたりする場合があります



妊娠中の検査で

**100mSv 未満 (※) では  
胎児への影響は  
認められません**

妊娠の可能性がある場合は、  
主治医にご相談ください。

**小児の検査**では、小児の放射線に対する感受性は、大人に比べて数倍高いと考えられておりますが、診断に影響が出ない範囲で可能な限り線量を低くして撮影を行なっております。

放射線は、光や電磁波の仲間なので体に残ったり、蓄積していくことはありません。  
放射線によって、身体の細胞が損傷を受けることがあります。が、**今までの検査の被ばく量を合計する必要はありません。**細胞は常に新陳代謝により入れ替わっているため、**合計すると過大評価になります。**

(1回の検査で受ける、一般的な線量を記載しています。)

(※) 1回の検査で受ける被ばく線量になります

医療の分野では 100 年以上前から放射線が使われており、病気の診断あるいは治療に大きく役立っています。ただし、放射線は不適切に多く浴びると皮膚の紅斑、脱毛、不妊あるいは発がんなどの身体に悪影響があることも知られています。そのため、**医療現場では医師が患者さんの状態をよくみた上で、診断あるいは治療に必要と判断した場合にのみ放射線を利用しています。**また、検査に用いる放射線の量は、身体に悪影響が出る量と比べるとずっと少なく、さらに患者さんの体形や年齢にあわせて適切な量の放射線で検査を行うように努めています。